

特別寄稿

名古屋大学・大幸地区の再整備について

杉浦 康夫

平成18年度補正予算で大幸地区の保健学科本館の一部取り壊し、改築が認められました。耐震改修対策とはいえ、2年連続の新築整備費の措置で、施設整備の主なものが終わり、幸運であるとしか言いようがありません。平成12年保健学科設置以来、保健学科に関わった人たちにとってはある意味では昭和52年に医療技術短期学部設立以来の悲願が実ったといえるでしょう。今回の新築で保健学科の整備率は90%近くなり、名古屋大学の中での保健学科の施設整備としては、ほぼ完成といえます。

大幸地区は愛知教育大学名古屋施設整備後援会（当時丹羽兵助後援会長）からの寄付地であり、愛知教育大が統合移転した跡地へ、名古屋大学附属病院分院という教育・研究、医療機関であればということで昭和50年に名古屋大学に移管されました。昭和52年医療技術職員養成のために設立されていた3附属学校を、名古屋大学医療技術短期大学部として改組新設し、大幸地区に設立しました。一方、名古屋大学医学部附属病院分院は狭隘な東区東桜地区から「現状移転」と短期大学部の実習病院として昭和54年に新たに建設、移転されました。現在の保健学科本館は医療技術短期大学部として旧愛知学芸大学（現愛知教育大）名古屋分校の校舎として使われた建物でした。これは三菱重工業本社として昭和13年に建築され、爆撃により破壊され、改修されたものです。名古屋大学移管後、名古屋大学医療技術短期大学部となり、昭和60年に理学療法学科・作業療法学科の増設に伴い分館が造られ、分院が平成9年大幸医療センターとして鶴舞地区に再編成されるまで、附属病院分院と保健学科校舎という形で大幸キャンパスは発展してきました。

平成12年医療技術短期大学部が医学部保健学科に改組されスタッフも増加し5専攻になりました。平成16年には大学院が設置され、教育研究に対する高度化と、高度な医療人育成への需要も高まり、学生の増加を基に新しい校舎、研究室を求める声は高まっていました。その時宜にあった校舎新築は今後の保健学科、医学系大学院の発展のためには大変重要なことです。

平成13年国立大学施設緊急整備五ヶ年計画が始まりましたが残念ながら医学系に関しては大幸地区も含めて改修のみ行うという方針が大学中枢部(?)で決められたらしく、医学系に関しては一つの新築も行われませんでした。平成13年からの緊急5ヶ年計画期間中ただ改修のみということで進んできました。大幸地区もその例に漏れず、平成14年に修士コースの設置に伴い大幸医療センターの2階の改修と図書館の改修拡大が行われたのみでありました。

国の第一次緊急5ヶ年整備計画では、当初の平成13年には3900億円という補正予算を立てられ、総額5000億円を計上しました。多くの大学関係者は国立大学の施設が早急に整備されると期待したにも関わらず毎年予算の半減を繰り返されました。平成17年度当初予算では1000億円を切るに至り、新たな予算措置緊急対策を講じなければ国立大学の校舎の老朽化はひどく、国際競争に勝てない大学になってしまうという認識が広まりました。平成18年4月に第二次緊急整備5ヶ年計画が、総額1兆2000億円を調達し、整備をすることを前提として、決定されました。

名古屋大学は幸運にも平成17年度補正予算で大幸本館の改築のための実習室整備として、4階建ての3300m²の校舎が新築され本館の改築に向けての動きが始まりました。この動きは文書資料室に残されていた戦時下に爆撃され、かなりひどく破壊された建物の写真(写真1, 2)が決定的であり、文科省文教施設部の担当者の心を動かしたことは間違いありません。文教施設部に行くたびにそれを言われたのを覚えています。

平成18年補正で大幸地区2号館の改築と大幸体育館の改修が認められました。校舎2号館は保健学科本校者の一部保存とともに認められました。保存する本館北部には昭和天皇の行幸の部屋と階段が残されており、今後保存も含めた資金の検討もしなければなりません。また、医学系の学生のクラブ活動に広く使われていた大幸体育館は耐震診断の結果、Is値0.1を切る状態で学生のクラブ活動も停止せざるを得ませんでした。大学本部の基本的な姿勢としてIs値についてもあえて全学に公表して、いかに耐震改修を順次進めてゆくかを全額に明らかにしつつ、施設整備を進めようという立場を貫きました。

平成18年度補正予算で改修が決まったことは、大学施設整備の大きな前進であり、大変な喜びでした。今後これらの施設をうまく使い保健学科の一層の教育、研究の充実、発展を期待しています。

(名古屋大学理事・副総長)

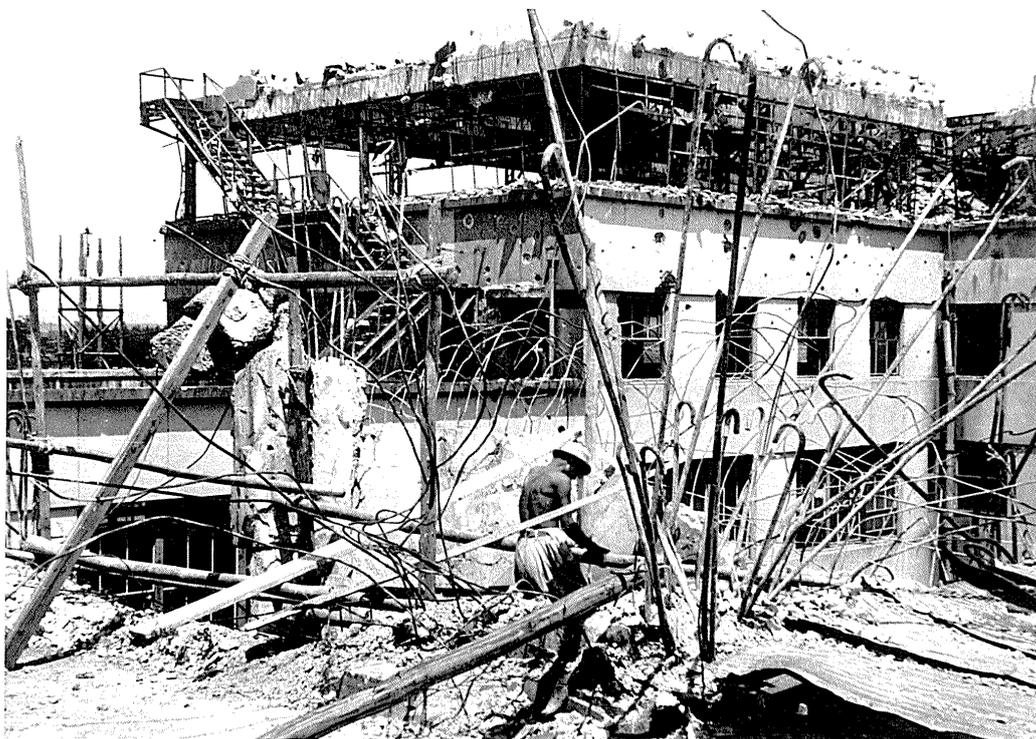


写真1 対戦中爆撃により破壊された校舎の一部



写真2 爆撃後改修中の校舎の一部